
巻頭言

2006.10月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

一念、岩をも通す 2006

茗溪塾塾長 宇野雅春

この表題で教務だよりを書く季節になりました。毎年この時期にこの表題で書いて違和感がないのは、「一念」の下、頑張っている生徒が目につくからでしょう。あるいは逆にあっちこちに振り回されず、それぞれの目標に向かって一途に努力してほしい、と願わずにはいけない生徒たちが存在しているからかもしれません。受験生にとっては、あとで振り返れば極めて大切なこの時期、健気に頑張り続けてほしいという願いがおのずと生じてくる、ということなのです。

どんな仕事をするにも、最終的にはその人なりの哲学というか、モットーというか、こだわり、やり方が出てきてしまうものです。適度にうまくやりこなす人もいるでしょうし、すべてのことに気を回して完璧にやり遂げる人もいるでしょう。気合を入れるところと、ちょっと抜くところのバランスをうまくとっている人もいるかもしれません。いずれにしても、それが「人となり」なのかもしれません。「水茎の(毛筆)あと」にその人が表れると詠んだ歌がありましたが、その仕事ぶりに、その人が出てくる、ということなのです。

先日NHKの『プロフェッショナル』という番組を見ました。40歳になって初めて「ロボット」を本格的に研究・開発する道を選んだ、ある研究者の姿が紹介されていました。

「恋をして人の痛みがわかる研究者になれ」。

使う人が使いやすいものでないといくら精巧なロボットを使ってもダメだ。そのロボットを使い目的を遂げようとする人の心にそわなければ意味がない、などということをおう表現しました。

「研究にはタブーはない」。

彼はDIYショップで買ってきたドライバーを、精巧なロボットの部品に使うというおよそ大学の研究者らしくらぬ行動が平気でとれるし、いわゆる研究者の常識まで「とにかく作ってみよう」「とにかくやってみよう」と試していくのです。

そして今、人の命を救うのに他の人の命を犠牲にする必要のないようにと、「救助ロボット」の実用化に向けて、その情熱を集中させているのです。

彼もすごいと思いましたが、彼をそう変えるに至った一つのきっかけに注目せざるを得ませんでした。工業高校の機械科の教師を単にそつなくこなしていた彼が、その人生の転機となる出会い。それは講師の力量向上のために設けられた「国内留学制度」で、好きだからの一点で何気なく選んだ筑波大学で得られました。

ロボットの研究に一途に取り組む、若い研究者集団の「熱い取り組み」が彼が変わるきっかけでした。学生が納得できるまで、その実験に寄り添い付き合う大学の講師。そして「そういうものなんだよ」と生半可に納得するのではなく、一途に真理を探究しようとする学生の姿。来る日も来る日も、時間に関係なく実験と議論を繰り返す彼ら。そして真理、正しい結論を共有できた時の喜び。それは、彼が今までの人生の中で触れることのない世界だったのでしょう。彼は勇気をもってそれまでの自分の人生と決別します。そして、若い学生に混じって自分の研究生活をスタートさせたのでした。

塾と受験。それはそれぞれの生徒にとっては、ひょっとすると最初の「熱い出会い」なのかもしれません。